（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	近藤　有希子
論文題目	現代ルワンダの親密性 ―継続する暴力下に生きる人びとの沈黙と応答能力の可能性―		

（論文内容の要旨）

本論文の目的は、1990年代前半に深刻な紛争と虐殺を経験し、親密圏の大部分が破壊されたルワンダ農村社会において、現在、人びとが生存のための社会関係をどのように再構成しているのかを明らかにすることである。アフリカに限らず多くの紛争後社会では、対立した集団間の対話や罪の告白など、すなわち「語ること」によって和解の実現と共同体の再生が目指されてきた。それに対して本論文は、人びとの沈黙や語りえない情動が、どのように共生の実現を可能にしているのかを探究した。

第1章では、本研究の背景と目的を示した。ルワンダでは、紛争後も続く権威主義的な国家体制のもとで、人びとは政権の弾圧を恐れて身構え、沈黙している。本論文は、人びとのそうした行為が相互の配慮や道徳性にもとづく親密な関係性の生起につながることを論ずるという、論文全体の見取り図を提示した。

第2章ではまず、トゥチとフトゥというエスニック集団が植民地統治下で人種的な差異として構築された歴史を整理し、また、1994年の虐殺時にはトゥチとフトゥが一枚岩の集団として衝突したのではないことを論じた。さらに、虐殺が終結した1994年7月以降にも深刻な人権侵害がルワンダの国内外で継続してきたが、それを人びとは「戦争（*intambara*）」という語で指示し、認識していることを指摘した。

第3章では、ルワンダの現政権が虐殺の直後から実施している国民の和解と国家の統合を目指す取り組みを概観した。政権は国内のエスニシティの存在を否定し、国民を一様に「ルワンダ人」に包摂するとともに、他方では「トゥチ＝生存者」「フトゥ＝加害者」という二元的なカテゴリーも強調した。そして、その過程で正統なものとして創出した「国家の歴史」に合致しない人びとの経験や語りを厳しく取り締まっている。人びとは「語ること」によって国家の暴力に曝されることを危惧して身構え、沈黙していることを記述した。

第4章では、ルワンダ農村社会において人びとは土地をどのように獲得しているのかを分析した。現在、土地を売買する取引が増加し、世帯間の土地保有面積の格差が顕著になりつつある。しかし他方では、土地が無償で貸借されることで、保有する土地の面積が小さい世帯の生存が可能になっていることを明らかにした。

第5章では、寡婦や離婚女性、孤児を対象として、生活空間がいかに共有され共食がおこなわれているのかを検討することを通して、親密な関係性がどのように構築されているのかを論じた。こうした関係の多くは、トゥチとフトゥという集団範疇の内部に存在していたが、他方で、家族の大半を失ったトゥチの人びとの困難に対して、フ

トゥの近隣住民が内発的に応答するという事例も存在していた。これらから語りえない経験こそが、他者の困難への応答を導いていることを論じた。

第6章では、現政権が創出した「国家の歴史」が全国的に強調される「虐殺記念週間（毎年4月）」に、村で生起した出来事に着目して、公共空間において人びとが他者の痛みにいかに応答しているのかを検証した。「嘆くこと」を公的に承認された「虐殺生存者」は、公的な場でみずからの体験を語り、国家から家屋や補償金を配分されている。しかしこうした行為は、自己の経済的な利益を優先しており道徳性を欠くものと見なされる。大部分の村人は「国家の歴史」には回収できない個別の経験と記憶を保持しており、それは、身体化された記憶として表出される。それを感知した周囲の人びとは、共約不可能な個人の痛みに対する想像力を喚起されていることを論じた。

第7章では、軍隊に志願することを選択した農村の若い女性たちを事例として、人びとのあいだの葛藤を記述した。近年の農村では人口増加と土地の狭隘化によって耕作地が減少し、現金稼得の必要性が高まっている。彼女たちが軍隊を志願したことには、よりよい生活を求めて国家の方針に迎合する姿が見て取れる。それに対して家族や親族、恋人たちはときに強い反発を示し、ジェンダーや世代にもとづく道徳性を強調する。そこには、生存空間を守ろうとする個々人の切実な願いが存在していた。

結論となる第8章では、現代のルワンダ農村社会において、他者の痛みを想像し、それに応答する可能性は、「語ること」だけではなく、人びとの身構えや沈黙のうちにも存在することを論じた。彼らは、国家が要請する均質で画一的な市民像には、けっして合致しない存在であり、「国家の歴史」からしばしば排除されている。しかし、彼らの相互行為には、複雑で多様な経験やかけがえのない記憶に対する想像力と応答性が示されており、そこには、人びとの生存の次元の公共性と呼べるものが見いだせると結論した。

（ 続紙 ２ ）

（論文審査の結果の要旨）

ルワンダ共和国では1990年から紛争が起こり、1994年には多数派のフトゥのエリート層や「暴漢」集団が少数派のトゥチやフトゥ穏健派を虐殺する事態になった。この虐殺時には、村落社会や共同体の内部だけではなく、家族や親族集団のなかにまで殺戮や脅しなどの暴力が及び、社会関係が大きく破壊された。さらに紛争の終結後には、現政権による強権的な国家形成が進行中であり、人びとは国家による深刻な暴力の影響を受けている。本論文の目的は、このような社会状況のもとでルワンダ農村社会の人びとが、生存のための社会関係をどのように再構成しているのかを解明するところにある。

こうした研究のために現地調査を実施することには、多くの困難がともなう。第一に、この研究は現政権の批判につながるものと見なされて、行政のさまざまなレベルにおいて調査が妨害され、ときには調査許可が剥奪される。第二に、このような調査は、過去に起こった暴力的な対立を俎上にのせるため、調査対象者である村人たちの協力が得られないことがある。本論文は、以上の困難を粘り強く克服しつつ、村人たちの社会関係を詳細に記述し分析した優れた民族誌である。

本論文の学問的意義は、以下の三点にまとめられる。第一に本論文は、これまで無批判に「虐殺の前と後（紛争の前と後）」と分けられてきたルワンダの政治的状況を、村人の視点から批判的に再考している。生活の場が戦場になるという体験は、単純に暦のうえで区切りをつけられるものではない。また、虐殺が終結した1994年7月以降にも、ルワンダ国内外において人権侵害が継続しており、強大な警察力や軍事力を背景として厳格な国家統治をおこなう現政権に対して、人びとは暴力を恐れ、身構えている。本論文は、こうした村人の視点に立って、国家権力による暴力の存在を詳細かつ批判的に解明した。これはルワンダ研究にとどまらず、現代世界における平時の暴力構造を論じたものとして、非常に重要な意義をもつ。

本論文の第二の貢献は、抑圧的な現政権のもとで国家に包摂されつつ、その意に従わない場合には排除される人びとの存在と、彼らの共生の可能性を綿密に解明した点である。虐殺後のルワンダでは、現政権が国民の和解と国家統合を目指す政策を強権的に実施し、エスニシティを否定して全国民を「ルワンダ人」として包摂してきた。他方で現政権は、国民を「トゥチ＝生存者」「フトゥ＝加害者」と分類し、人びとの多様な経験を黙殺している。虐殺時に人びとは、画一的なエスニック・カテゴリーには回収できない複雑で多様な経験をしており、現在もこうしたカテゴリー化に対峙し、ときには戦略的にそれを利用している。すなわち人びとは、個々人の代替不可能な経験や記憶を抑圧する現政権との衝突を回避しつつ、同時に、ともに生きる他者とのあいだで微細な応答をおこなっている。本論文は、こうした人びとの存在を詳細な観察や語りの収集をとおして鮮やかに描き出しており、その功績は高く評価できる。

本論文の第三の貢献は、紛争後社会に関する先行研究が人びとの語りに注目してきたのに対して、人びとの沈黙や「語りえない」ことも親密な関係性を生成する重要な契機となることを解明したところにある。従来の実証主義的な歴史研究は、人間がみずからの戦争体験を語らないことを客観的な事実の不在として扱ってきた。ルワンダ研究において人びとの沈黙は、権威主義的な政権に対する「抵抗」の実践として表象されることが多かった。それに対して本論文は、他者の困難に対する応答的な関係性は、沈黙する他者に対する想像力を媒介として生起することを解明した。これは、紛争後社会の研究に新たな視座を提供する重要な貢献である。

以上のように本論文は、国家による暴力が継続するルワンダにおいて、人びとが他者の沈黙に応答し、親密な関係性を構築していることに関する厚い記述と深い考察をおこない、アフリカ地域研究だけではなく、紛争後社会の人類学的研究にも多大なる貢献をした。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成31年1月24日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。